

17 Duchene 型筋ジストロフィーにおける咳嗽能力の維持が
呼吸管理と在宅生活に与える効果(症例を通じて)

株式会社アール・ケア 訪問看護ステーション ママック 岩下 修

【目的】 米国胸部疾患学会:ATSの「Duchenne 型筋ジストロフィー(以下DMD)の呼吸ケア」に関するコンセンサスステートメントによると、24時間人工呼吸器が必要な場合においても、気管切開をせず非侵襲的換気療法:NPPVを用いて有効な換気補助、活動性やQOLの維持は可能である。そのNPPVを不適應としないためには、気道クリアランスと肺や胸郭の可動性を維持する呼吸理学療法を積極的に行なうことが必要とされている。本疾患においては人工呼吸器による呼吸管理は不可避であるが、気管切開の実施時期を遅らせるための気道クリアランスと胸郭可動性の維持、機械とバギングによる最大強制吸気を含む呼吸理学療法が有効であったことを報告する。

【対象・方法】 DMDの兄弟(H27年現在:兄30歳、弟28歳)、機能障害度は両者ともStageⅧ。現在終日人工呼吸器を使用(NPPV:兄H27年4月よりTPPV:弟)。訪問看護ステーションからのリハビリテーションを週2回提供。生活状況と共に呼吸介助による最大呼気流速(以下PCF)を9年間(H17年~H27年)、PCFを計測(3回実施中の最大値を記録)し経過を追った。本症例には発表趣旨を説明、同意を得た。

【経過・考察】 本症例は9年間検査入院以外の入院はなく、PCFの年間平均値においても低下していない。また、活動面では現在も自宅で仕事を継続している。気道クリアランスの確保と拘束性換気障害因子への介入は呼吸機能と活動・参加の維持に有効であると言える。